

リスクコミュニケーションのあり方に関する取りまとめ骨子（案）

1. リスクコミュニケーションとは

- ◇リスクアナリシスの中の非常に重要な要素であり、最も難しい。
- ◇リスクコミュニケーションの肝は「対話・共考・協働」(engagement)であり、説得の場ではない。
- ◇リスクコミュニケーションは、その狙い（目的）によって具体的な活動内容が決まるので、まず、その目的を明確にする。

（これまでの議論）

- ・リスクコミュニケーションは、リスクアナリシスの3要素の中で非常に重要であり、また、最も難しい。
- ・また、リスクコミュニケーションは、その背景に公民権運動とか民主主義とかの哲学・思想があって始まっているということが大前提として考えるべき。
- ・そして、リスクコミュニケーションの肝は「対話・共考・協働」(engagement)であり、説得の場ではない。
- ・しかしながら、最近では、「リスクコミュニケーション」と称して、単なる説明会や説得を行っていることがあり、リスクコミュニケーションそのものが変節してきているのではないか。
- ・科学的根拠に基づく「リスクアナリシス」の考え方が国民に十分に理解されていないが、これは、確率論的に考える「リスク」の概念が理解されない、人が本来持つ「リスク認知」にはバイアスがかかる、強烈なインパクトのあった過去の事案に引きずられる、情報提供不足等々の理由があるのではないか。
- ・リスクアナリシスの考え方の普及が重要な課題ではないか。
- ・リスクコミュニケーションは、その狙い（目的）によって具体的な活動内容は自ずと決まるので、まず、その目的を明確にすべき。
- ・BSE や放射線の問題をみていると、リスクについての理解が深まって沈静化したというよりも、実際には、気にしなくてよい状態になって「忘れられる」ようになっただけなのではないか。
- ・「忘れる」能力に期待せずに、きちんと対策に取り組むべきではないか。

2. リスクコミュニケーションの方針

- ◇食品安全委員会が行うリスクコミュニケーションの中心は、評価結果をしっかりと伝えること。
- ◇リスク管理措置と一緒にリスクコミュニケーションをした方がよい。
- ◇ターゲット毎に複層的・重層的に行う必要がある。

（これまでの議論）

- ・食品安全委員会としてのリスクコミュニケーションの中心は、個別のハザー

ドごとにどのように評価したのか、特に国民生活に大きく影響するような評価結果をしっかりと周知徹底していくこととではないか。

- ・リスクコミュニケーションでは、リスク情報のみならず、リスク管理措置と一緒にリスクコミュニケーションしていくことが理解の助けとなるのではないか。
- ・その際には、リスクマネジメントにかかるコストの情報も提供して、どのような管理措置をとるのが望ましいのか国民も一緒に考えていくようにする必要があるのではないか。
- ・また、フードチェーンが複雑化し、消費者が多様化していることを踏まえると、リスクコミュニケーションはターゲットごとに複層的・重層的に進める必要があるのではないか。
- ・なお、ステークホルダー間の理解と共感を醸成していく様々な活動を複線的に行っていくのも、リスクコミュニケーションの一助となるのではないか、

3. リスクコミュニケーションの目標

◇リスクコミュニケーションの究極の目標は、リスクを踏まえ一人一人が自分で行動を選択できる状況を作り出すこと。

◇合意形成はリスクコミュニケーションの唯一の目標ではなく、結果として得られるものとする。

(これまでの議論)

- ・リスクコミュニケーションは、究極的には市民一人一人が自分で選択できる状況を作り出すことが目標なので、その判断根拠となる必要な情報を得られるような場とすべき。
- ・そして、リスクコミュニケーションの場に対して何らかの特定の権力のバイアスがかからないように設計する（コミュニケーションデザイン）ことが基本的な考え方。
- ・リスクコミュニケーションの結果をガバナンスにつなげていく仕組み作りが重要。
- ・リスクコミュニケーションの目標は、「合意形成」のみではなく、合意形成は結果として得られるものとするべき。
- ・社会的合意を目指すのなら、リスクコミュニケーションにこだわらず、コンセンサス会議等他の手法の導入も検討すべき。

4. リスクコミュニケーションの評価

◇リスク情報について公正さであると認知されているか評価する。

◇リスクコミュニケーションの過程（プロセス）を段階的にそって評価する。

(これまでの議論)

- ・リスクコミュニケーションを行ってきた経験では、参加者のアンケート結果

の数値では効果があったとされても、参加者の心に響いていないと感じられるギャップが存在するが、リスクコミュニケーションの成果はどのように評価したらよいか。

- ・リスクコミュニケーションの効果（成果）は、「合意形成」を唯一の目標として評価するのではなく、そこに至る過程を評価すべき。
- ・リスクコミュニケーションの目的は異なっても、その評価指標には共通的な次元が存在し、目的との関連に応じて適切に評価すべき。
- ・リスク情報の発信者やその内容が公正さであるとリスクの受け手に認知されることがリスクコミュニケーションの成功プロセスの端緒となるので、これが達成されているのかきちんと評価した方がよい。
- ・現在の食品安全委員会のリスクコミュニケーションのアンケート様式を見る限り、この点の評価が不足しているのではないか。

5. リスク情報の提供方法

◇分かりやすさに留意しつつ、基本的に全ての情報を最大限早く提供する。

◇現段階で分からないことも含め、判断根拠（判断のプロセス）を発信する。

（これまでの議論）

- ・基本的に情報は全て提供し、その次に、情報の受け手にどのような形で分かりやすく提供するかということを考えないとならないのではないか。
- ・重大なハザード情報は、詳細を整理することに時間を費やすよりは、最大限早く、その時々で正確な情報を提供した方がよいのではないか。
- ・その際には、「間違ってはならない」と強く思い込みすぎず、現段階で分からないことも含めて、その判断根拠（判断のプロセス）を発信していけばよいのではないか。
- ・なお、リスクコミュニケーションの中で、参加者が理解できないような難しい言葉が使われると、上から目線だと感じてしまうこと等にも留意が必要ではないか。

【今後の論点】

- ・忙しい消費者に対して、必要最小限知っておいてもらいたい情報を、ソーシャルメディアの活用も含めて、どのように提供したらよいか。
- ・海外では、当該リスクの相場観をどのように伝えるのか、いろいろ工夫している。特にマスコミに対して、リスクの相場観をどのように伝えていくのか。

6. リスクコミュニケーションにかかる費用

◇リスクコミュニケーションを実施するにも費用がかかる。

（これまでの議論）

- ・リスクコミュニケーションを実施するには、非常にコストと労力がかかる

という点をまず認識すべきである。

- ・日本では、国も自治体も財政状況が厳しい中、予算をやりくりしてリスクコミュニケーションを実施しているが、海外では結構コストをかけて力をいれて実施している。

7 ステークホルダーの役割

◇ステークホルダーには、それぞれの役割があり、そして共考の姿勢が求められる。

(1) 消費者の役割

◇食品安全に関する知識を備え、正しい判断力を身につける。

(これまでの議論)

- ・リスクコミュニケーションが機能するには、消費者にも役割があり、食品安全に関する知識を備えて、多角的、合理的に判断できる消費者にならなければならないのではないか。

(2) 企業の役割

◇食品安全問題は社会全体で取り組むものという姿勢をもつ。

(これまでの議論)

- ・食品安全の問題は、社会全体で取り組んでいくものなので、企業においても、しっかりとした企業ポリシーや企業の倫理観というものをもち、企業も行政や関係者と共同して取り組んでいくという姿勢をもつべきではないか。

(3) 科学者の役割

【今後の議論により加筆】

【今度の論点】

- ・リスクコミュニケーションを進めていく上で、科学者にはどのような役割が求められるか。

(4) メディアの役割

◇社会の正しい判断のために、科学的に正確な情報を提供する。

(これまでの議論)

- ・リスクに関する報道のあり方にも大きな問題があり、それを前提に、報道に惑わされないようにするには、消費者はメディアリテラシーを身につけ、正しく判断できる「地力」を向上させる必要があるのではないか。

8. 安全教育・リスク教育

◇食品のリスクに対する基礎知識（科学の不確実性も含め）の普及が最も重要。

◇現状のフードシステムへの理解を深める必要がある。

◇ただし、安全教育・リスク教育はリスクコミュニケーションそのものではない。
(これまでの議論)

(1) 安全教育・リスク教育の必要性

- ・リスクコミュニケーションのベースには、食品のリスクに関連する基礎知識が必要であるが、その基礎知識がない中で、断片的に情報が提供されていることで、かえって不安感を高めることにもなりかねない。その基礎知識を習得できるような教育が必要ではないか。
- ・また、食品に対する消費者の不安や不信感は、ファームとテーブルが遠くなり、フードシステムに関する理解が足りなくなっていることが一因であろうから、これに対する理解を深めることが重要ではないか。
- ・普通の企業でも、虚偽にならない範囲で誇大な広告、表示というのは行っている。誇大な情報に惑わされないような消費者となるためにも、食品のリスクや効果について正しい知識を身につける必要があるのではないか。
- ・子供に関しては、大人世代がもっている「食品」に関する常識が伝わっていないという前提で、間違った知識が身につく前に、正しい知識を教えていくべきではないか。また、その際には、食品のリスクを学ぶ上で必要な「科学には不確実性が伴う」ということについても併せて教えていく必要があるのではないか。
- ・また、子供時代に教わっても、大人になれば忘れるということもあるので、大人もターゲットに安全教育・リスク教育を行う必要があるのではないか。
- ・ただし、安全教育・リスク教育は、リスクコミュニケーションと一部重なり合うところはあるが、リスクコミュニケーションそのものではないのではないか。

【今後の論点】

- ・子供のみならず、大人に対しても安全教育・リスク教育が必要であるという前提で、どのようなことが求められているか。また、食品安全委員会としてどのようなことを行うべきか。

(2) ネガティブ情報への対応

- ・ネガティブ情報に対しては、正しい情報をきちんと提供する等の対応や、そもそもネガティブ情報に左右されないような正確な知識を消費者に習得してもらう必要があるのではないか。

9. リスクコミュニケーションの担い手

◇相手に応じて事実を分かりやすく伝えるスキルを身につける。

(これまでの議論)

- ・科学的な専門家が必ずしもリスクコミュニケーションの優れた担い手でもなく、

- 相手に応じて事実を分かりやすく伝えるスキルを持っていることが求められる。
- ・また、リスク評価やリスク管理の決定過程に影響を及ぼせる者が直接ステークホルダーを対話することが基本で、話せるだけの人では、説明会の演者にしかない。

【今後の論点】

- ・これらのことを踏まえて、どのような者がリスクコミュニケーションを担うのがよいのか、また、そのような人材をどのように育成するのか。

〔クライシスコミュニケーションについて〕

(これまでの議論)

- ・リスクコミュニケーションとクライシスコミュニケーションは、定義も、その対応手法も異なるので、同一のものとは整理できないが、両者は表裏の関係、循環関係にある。
- ・それを踏まえて、この勉強会の場では、クライシスコミュニケーションのことを「何らかの非常事態（事故・事件）が起こり、健康影響が現れている、若しくは、現れる可能性が高い場合に行うコミュニケーション活動」ととらえたらどうか。
- ・一方、健康影響は現れていない（又は現れる可能性は低い）が、リスクについて正しく理解されていない（リスクが社会に受け入れられていない）ことにより起こる社会的混乱についても、一種のクライシスとも捉えられるが、このような場面への対応は、リスクについて共考するリスクコミュニケーションの手法の方が相応しいので、このような場面への対応はリスクコミュニケーションの一環として整理することとしたらどうか。
- ・なお、クライシスコミュニケーションは、実際としては、クライシスマネジメントと一体に行われるものであるが、考え方としては、クライシスマネジメントとは別のものとして整理したらいかか。